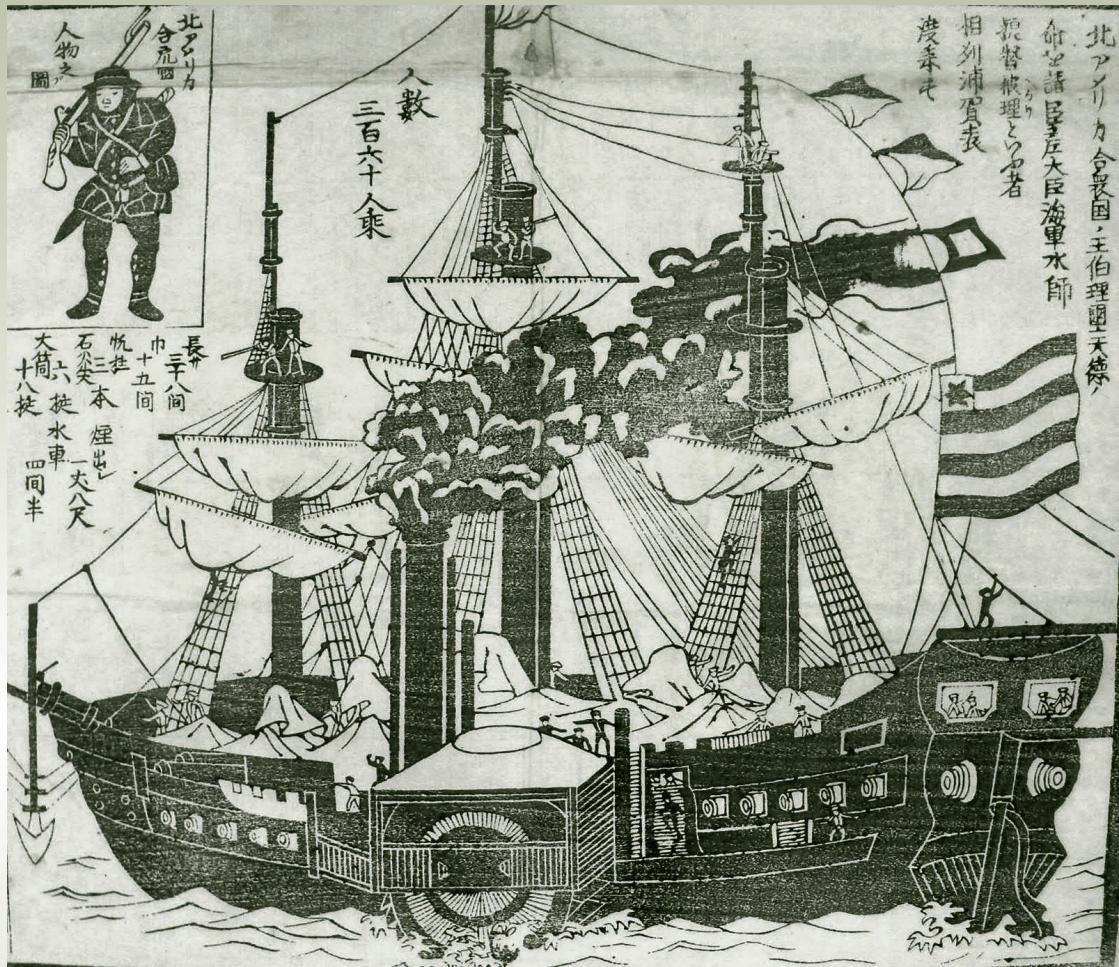


# 激動の時代 幕末維新の広島と古文書



平成23年3月28日(月)～ 6月11日(土)

## はじめに

江戸時代の広島藩領内の庄屋文書で、最も多く残されているのは、嘉永六年（一八五三）のペリー来航から明治四年（一八七一）の廃藩置県までの約二十年間、いわゆる幕末・維新时期のもので、もちろん時代が新しいことありますが、理由はそれだけにはとどまりません。

この時期、広島藩の領民はそれまでには経験しなかつた新たな負担を次々と課されることになりました。海岸防禦を目的とする御用銀のほか、大砲や小銃の材料とするため、寺院の梵鐘までも供出させられました。武士だけでは海岸や領内を守りきれないという理由から農兵も組織されます。

文久元年（一八六一）に広島藩主一行の領内廻在がいった後、元治元年（一八六四）と慶応二年（一八六六）には、隣国の長州藩を攻めるため、幕府や諸藩の軍勢が前線基地となつた安芸口や石見口へと領内を通行して行き、村役人や領民はその対応に追われました。また、第二次長州征伐では、佐伯郡が戦場となり、大きな被害を蒙つたほか、戦場へは領内から多数の農兵や軍用夫が強制的に駆り出されました。このような度重なる負担に対応するため、庄屋などの村役人は多くの文書を作成する必要があり、これが今日まで伝わっています。

廃藩置県直後に、領内各地で藩主引き止めに端を発する、いわゆる武一騒動が起りますが、これには、様々な負担に耐えてきた領民が、反対給付として期待した「涙金」が廃藩置県で御破産となり、いっそう窮乏することを恐れたという一面もあります。

今回の収蔵文書展では、幕末の激動の中で、領民が度重なる負担にいか耐えながら明治維新を迎えたか、寄贈・寄託を受けた収蔵文書を用いて紹介します。展示を通して、地域に残された地域資料が、歴史を読み解く材料になることを知っていただき、資料保存の大切さについて理解を深めていただければ幸いです。

# 一 海防から農兵へ

広島藩の海岸防禦は文化五年（一八〇八）ごろから本格化します。通商を求めて断られたロシア船の略奪行為や、イギリス船フェートン号の長崎港不法侵入事件などが続き、幕府は諸大名に警戒を命じたからです。瀬戸内海に面する広島藩でも防禦体制の整備を進めました。

しかし、その後は財政難から広島藩の軍備は手薄となりました。嘉永六年（一八五三）にペリリが浦賀に來航しても異国船防禦御用銀を領内へ賦課し、寸志銀を徴したほかは、大砲や小銃の材料とするため、寺院から梵鐘などを強制的に徵発する程度で、軍備の充実には程遠いものでした。

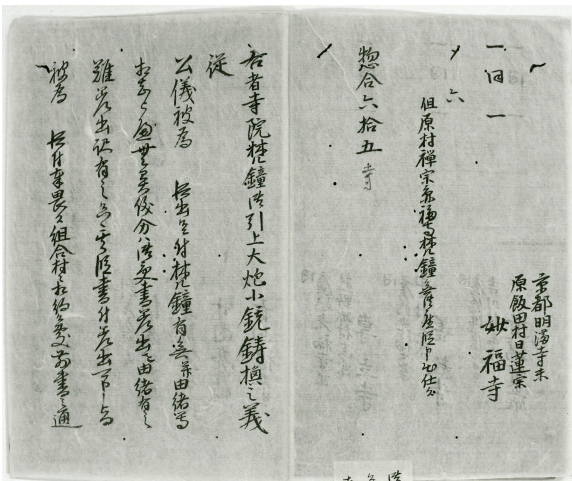
欧米諸国との通商条約締結に反発する尊王攘夷運動を背景とする朝廷の圧力に屈した幕府は、文久三年（一八六三）五月十日を攘夷決行期日に定めます。広島藩でも四月に領内へこれを布達し、安芸郡倉橋島・同島鹿老渡、豊田郡大崎島・御手洗・生口島瀬戸田、御調郡因島・向島に砲台を築きました。また、海岸防禦を固め、村を自衛するため領民から有志を募って農兵を組織し、西洋砲術や剣術を習わせます。幕藩体制のもとでは、年貢を納入する代償として、武士が領民の生命と財産を守るのが建前でしたが、それはすでに過去のものになろうとしていました。

その後も、長州征伐から戊辰戦争にかけて、広島藩兵の不足を補充するため、民間から強壯者が募集され農兵隊が結成されます。農兵隊は武芸の稽古を重ね、神機隊などは戊辰戦争でも活躍するようになっていきます。

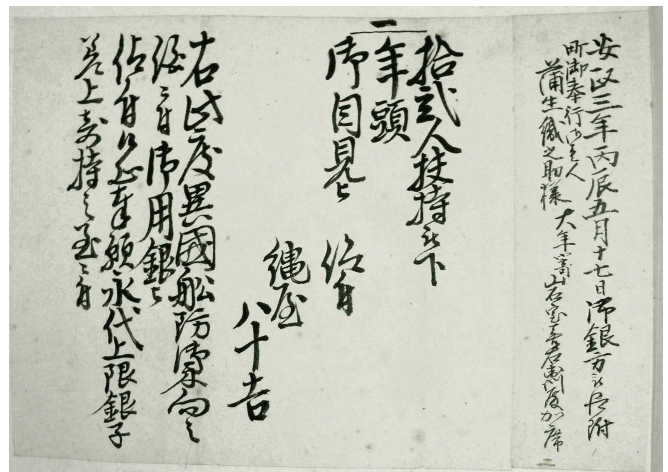


幕末の広島藩海防絵図（木村恒氏収蔵文書1）

広島藩役人が文化5年（1808）と12年に領内沿岸を巡見し、番所などの海防施設の位置、海岸線の長さや沖合いの水深などを描いて完成させた。文久3年（1863）に築調した7ヶ所の御台場の位置を書き加えている。絵図中の○印（生口島福田・因島大浜・向島立花）が砲台の位置。



賀茂郡寺院梵鐘引上げにつき辻寄せ書附（竹内家文書 6374）  
賀茂郡では、大砲や小銃の材料として諸国寺院の梵鐘を供出するようという安政2年（1855）の命令に応じて、その翌年、由緒のある国分寺や福成寺などを除く65口を供出した。



繩屋（保田）八十吉 12人扶持等の奉書（保田家文書6「褒状并公文 第壹」）  
八十吉は、異国船防禦御用銀の募集に応じて安政2年に10貫目を永代上納し（同4年にも50貫目）、翌年に藩から12人扶持を与えられた。

海防掛之者申渡り頭書  
 一此海外夷情打掛之治定を貴國(臣)の如く  
 海上の何れ軍ヲ攻め何れ軍ヲ退め向ふは御中  
 海軍の便向に蒙るべき御事と存じ候へども  
 必差向に道に相違居る固く御要に御座り  
 當差之旨に相違居る御座り申上り候方

賀茂郡竹原組海防掛へ仰せ渡され候頭書 (有田家文書)  
 文久3年3月に攘夷が決まると、広島藩は沿岸の農民を海防掛に任じ、異人上陸の場合は、藩兵を差し向けるまで身命をかけて守るよう命じた。

日田邦太  
 一 此者第一南無唱作第一島津三郎若  
 我輩痛恨之不堪依り皇玉  
 之為加天誅者也 三月分ナラズ  
 六月 有志

天誅された日田邦太の罪状 (竹内家文書 231「攘夷につき見聞書付」)  
 文久3年(1863)6月19日、広島でも開国論者の日田邦太(豊後杵築藩脱藩浪士・小串邦太)が暗殺され、首が梟される事件が起きた。

賀茂郡竹原組海防掛へ仰せ渡され候頭書 (有田家文書)  
 文久3年3月に攘夷が決まると、広島藩は沿岸の農民を海防掛に任じ、異人上陸の場合は、藩兵を差し向けるまで身命をかけて守るよう命じた。

海防掛之者申渡り頭書  
 一此海外夷情打掛之治定を貴國(臣)の如く  
 海上の何れ軍ヲ攻め何れ軍ヲ退め向ふは御中  
 海軍の便向に蒙るべき御事と存じ候へども  
 必差向に道に相違居る固く御要に御座り  
 當差之旨に相違居る御座り申上り候方

農兵取立てにつき心得方口演頭書 (極楽寺文書 1)  
 長州藩が文久3年の8・18政変で京都を追われると、その翌年、沿岸部だけでなく世羅郡などの山間部でも農兵が結成され、武芸稽古に励んで「上之御垣」となり、村の治安を守るよう命じられた。

即自國陸軍國去備充實  
 一書得精世之組の組兵惣盟義隊  
 一書得精世之組の組兵惣盟義隊  
 一書得精世之組の組兵惣盟義隊

盟義隊練兵取組方の頭書(左)と神機隊の内頭書(右)  
 (平賀家文書 1077・1246)  
 慶應三年九月

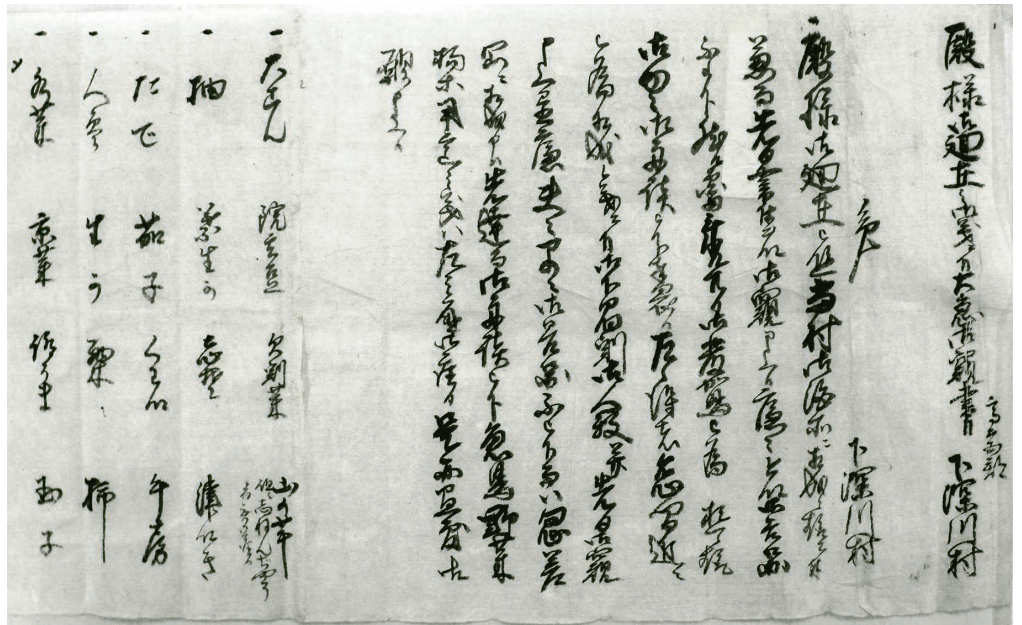
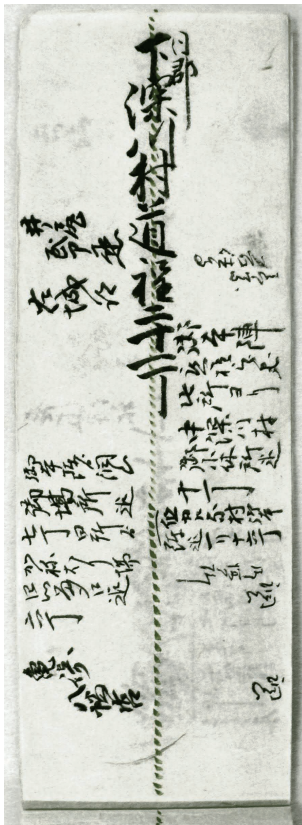
盟義隊練兵取組方の頭書(左)と神機隊の内頭書(右)  
 (平賀家文書 1077・1246)  
 明治元年(1868)に戊辰戦争が始まると、賀茂郡では村への乱妨狼藉者の侵入を防ぐため、豊田・御調郡に倣って組ごとに義民を募り農兵隊を結成し練兵を開始した。竹原組の盟義隊は、軍卒として戦争には参加しないと明言する。

その一方で、慶応3年(1867)9月、従来の農兵に物足りない広島藩士木原秀三郎(賀茂郡庄屋家の出身)等は藩の許可を得て、賀茂郡志和で義気ある農民を募って神機隊を結成し、大砲や小銃も含めた訓練を開始した。隊兵募集には同郡割庄屋竹内儀右衛門等も深く関わった。この神機隊は自費で戊辰戦争に参加し、東北まで遠征して活躍した。

安政五年(一八五八)に広島藩主となった浅野茂長(長訓)は文久元年(一八六一)の六月から十月にかけて三回、延べ七十日間にわたり領内をくまなく巡見しました。歴代藩主は、鷹狩りで領内の民情を視察することはありませんでしたが、鷹場のない地域までは出向く機会がほとんどありませんでした。

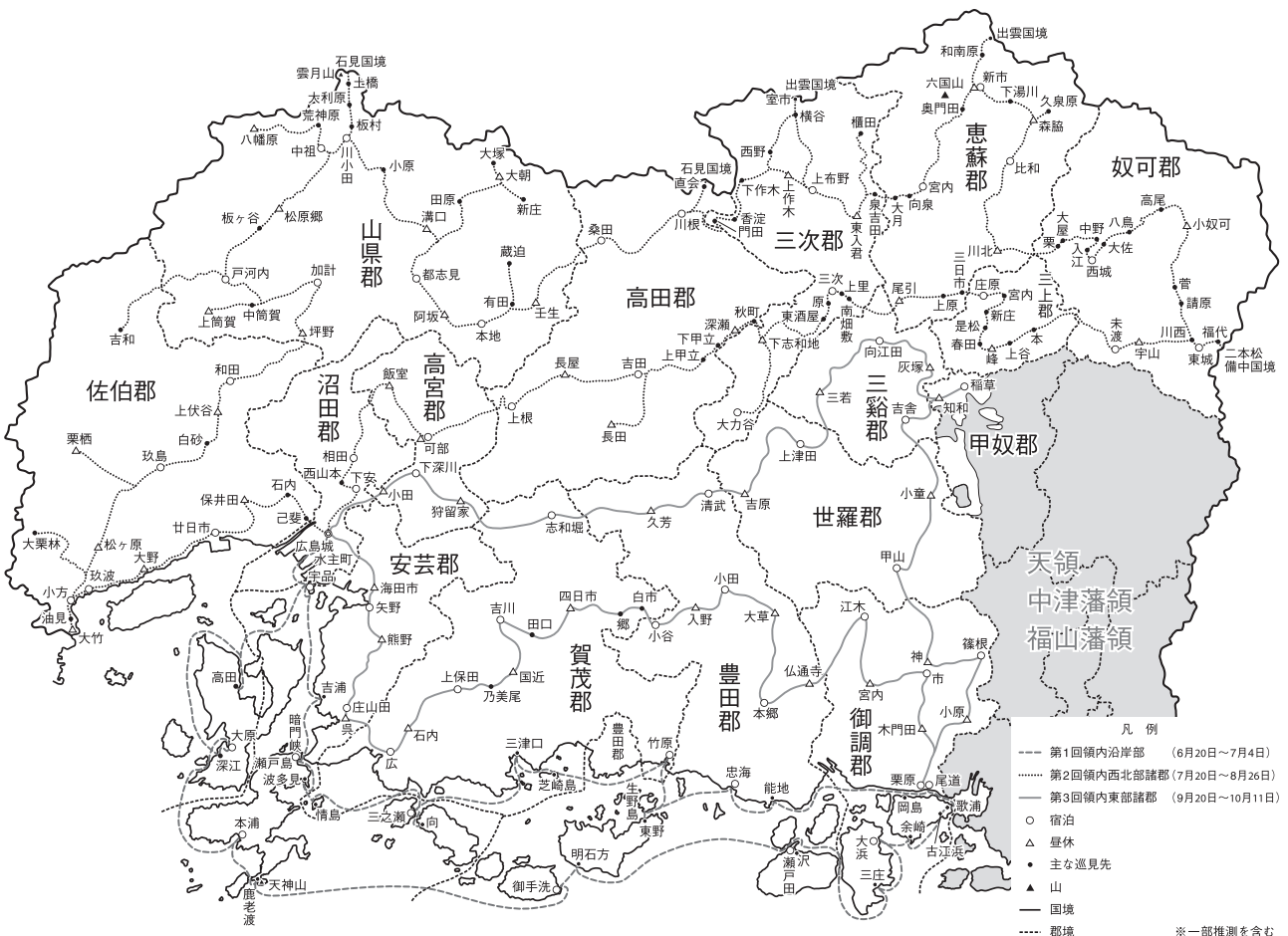
広島藩ではながらく守旧派が政権を握り、財政窮乏を理由に軍備増強には着手せず、領内は沈滞していました。茂長は、自らの目で異国船防備や国境警備の状況を把握し、今後の殖産興業政策を進めるため、領内の各種産業や領民の生活実態を視察し、今後の改革の起点にしようと思いました。茂長は国境では登山して隣藩を見渡し、順路の町村では産業を精力的に視察し、山村へも足を運んで農業の苦難をつぶさに見学しています。そして、廻在を通じて得た結果をもとに、文久三年に沿岸七ヶ所に砲台を築き、郡役所内に勸農方を置き、翌年には藩庁内に生産掛を設置して、本格的に産業育成と武器製造などを柱とする藩政改革に着手します。

藩主廻在に当たり、藩はできるだけ領民に迷惑をかけず、出費も抑制する方針を領内へ通達しましたが、総勢は藩主以下約三〇〇〇人を数え、その一行が各地で休憩、食事、宿泊するわけですから、廻在先の町村では、宿割りや道具や食材の調達、道案内などを始め、周到に準備を進める必要がありました。このため領内各地で藩主廻在に関する古文書が作成され、保存されています。



御廻在につき高宮郡引捨絵図(左)と下深川村庄屋より大急窺書(右) (重清家文書 939・103)

文久元年(1861)9月の第3回廻在では、高宮郡下深川村で藩主一行が宿泊する予定であった。しかし、出発直前になって村内の宿割りの指示がなかった。このため庄屋権三郎は、食材に関してもすぐに準備できるものと、2~3日前、前日でないと調達できないものがあるので、早く宿割りの指示をしてほしいと願い出ている。藩主の宿泊準備について経験のない村が当惑している様子がうかがわれる。左の絵図には視察候補の同村の銅山までの距離が記されている。



文久元年(1861) 広島藩主の領内廻在行程図

### 三 長州征伐と領民の負担

元治元年（一八六四）七月、長州藩は前年の八・一八政変の失地挽回を期して出兵上京しましたが、禁門の変で敗走しました。勢いを得た幕府は、尾張藩の徳川慶勝を総督に任じ、広島藩など西国二藩に出兵を命じました。この第一次征長は長州藩の謝罪により解兵となりましたが、その後、長州藩は武備恭順へ藩論を転換して幕府の要求を容れなかったため、幕府は慶応元年（一八六五）四月、再び出兵を諸藩へ命じました。

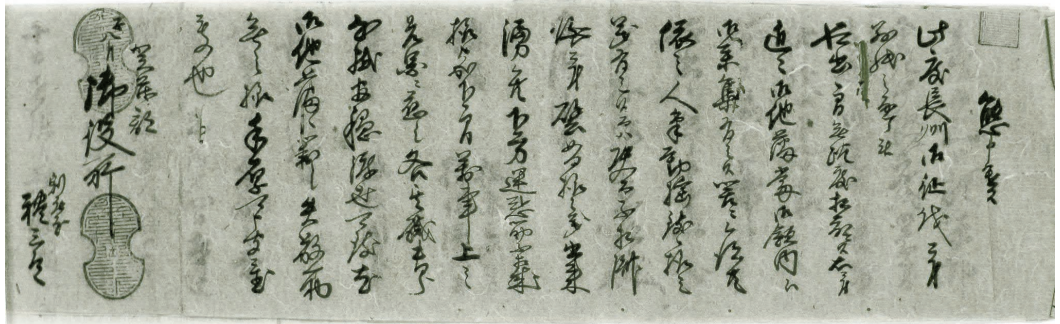
二度の征長で、広島は安芸口の前線基地となり、幕府と諸藩の数万人の軍勢が領内を通り、広島へ集結しました。道中各村の役人や領民は軍馬の宿泊や輸送、物資調達などの対応に追われました。各郡は軍用夫の徴集を命じられましたが、積極的に応じる者はなく、くじ引きなどで決定し、村ごとに幟を作製して出陣しました。

第二次征長では、長州藩と幕府との交渉は決裂し、慶応二年六月に芸州口でも戦端が開かれ、戦場となった佐伯郡では住民が戦禍に巻き込まれ、大きな被害を蒙りました。

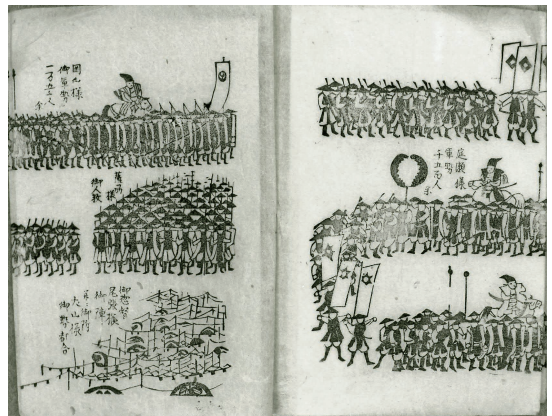
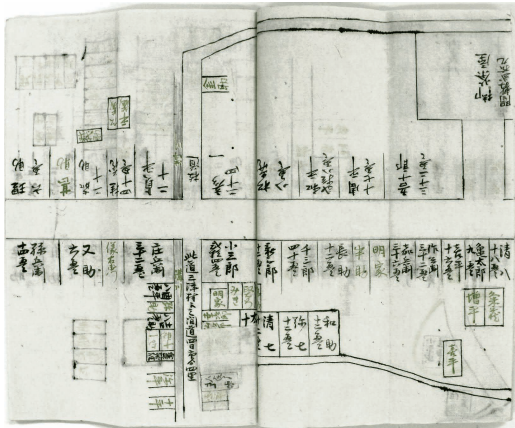
広島藩は戦争に終始反対し、幕府の出兵命令を拒否しましたが、長州藩との行き違いから交戦前となりました。この時、前線の間道を警備する藩兵の不足を補うために、領内各地から動員された農民は恐怖に怯えました。

第二次征長で幕府軍は敗北し、幕府の権威は一気に失墜し、土佐・広島藩が建白した大政奉還を受け入れたにもかかわらず、王政復古を迎え幕府は滅亡します。

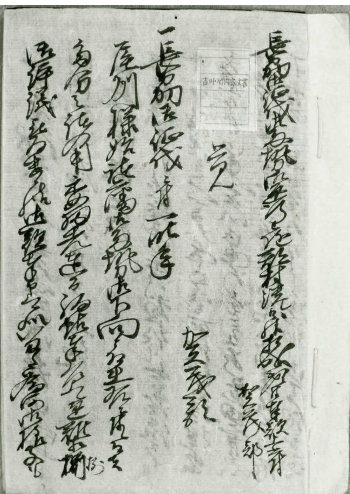
**第一次征長につき領民の心得に関する達し**  
(竹内家文書 498)  
元治元年（1864）7月に長州藩追討の朝命が下り、8月には諸大名の部署も決定、広島藩は山陽道先鋒とされ、広島に本営が置かれるなど出兵は現実のものとなった。藩は、今後諸藩の軍勢が入り込むが、領民に迷惑はかけないで動揺しないように布達を發した。



**賀茂郡往還筋引捨絵図**  
(竹内家文書 5445)  
これは賀茂郡割庄屋が作成した絵図（四日市御茶屋付近）で、家ごとに豊数が記入される。慶応元年（1865）4月、幕府は長州再征を發表し、5月に將軍家茂は江戸を進發した。幕府は11月に広島へ役人を派遣し、將軍が広島まで出征する道中で、軍宿にする家の豊数や間道等を広島藩に調査させた。

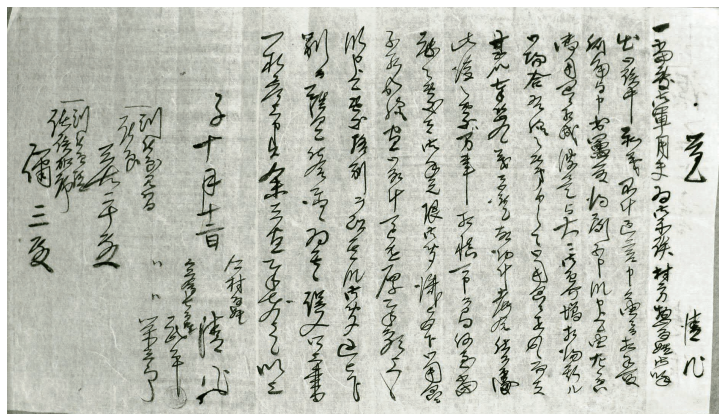


**諸大名様方御入込御行粧**（保田〔義郎〕家文書 108）  
元治元年の第一次征長で、広島城下に集結する諸大名の装束を描いた略図。左下は総督の徳川慶勝（尾張藩）軍の陣幕。



**賀茂郡郡村潰れに  
ならないよう歎願書**  
(竹内家文書 467)

第二次征長の開戦が目前に迫った慶応2年6月、賀茂郡割庄屋は、これまで48,000人も幕府・諸藩の軍勢が通行、宿泊したにもかかわらず、その代金がほとんど支払われず、その費用弁償に、人馬継立てや軍用夫等負担で疲弊した郡内へ賦課しても取立てる目途が立たない、このままでは郡や村



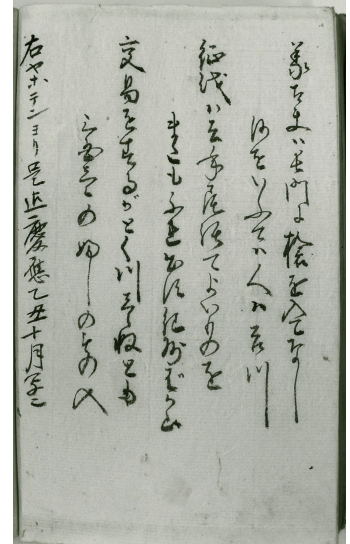
**軍用夫の説明で過言したことを詫げる証文**（有田家文書）

賀茂郡郷村清作は、第一次征長の軍用夫説明の席上で、くじ引きには参加しないと無礼な物言いをした。これは、その後村役人の説得を受け入れて提出した清作の詫び状。征長では兵糧や武具等の軍需品を輸送する軍用夫が必要とされ、領民から強制的に徴用された。領民はこれまで現実の戦争とは無縁であり、進んで引き受ける者はなかったため、くじ引きで決められた。

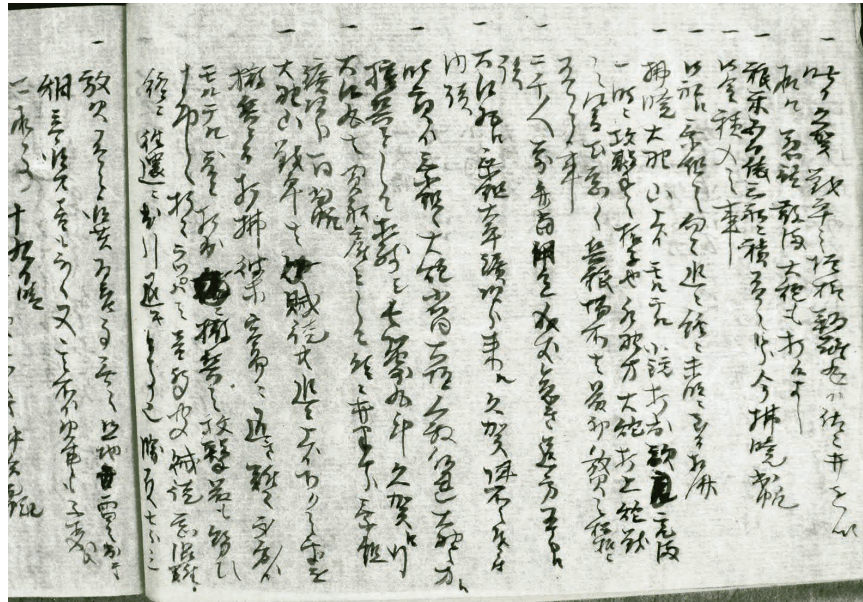
は潰れてしまうと、相当の宿料等を支払ってもらえるよう、藩に願っている。  
歎願書の中で割庄屋らは、第一次征長は総督徳川慶勝が民衆の困苦を思いやり、穏便な取り計らいで済んだのにと、再征に至った幕府の措置をあからさまに批判している。



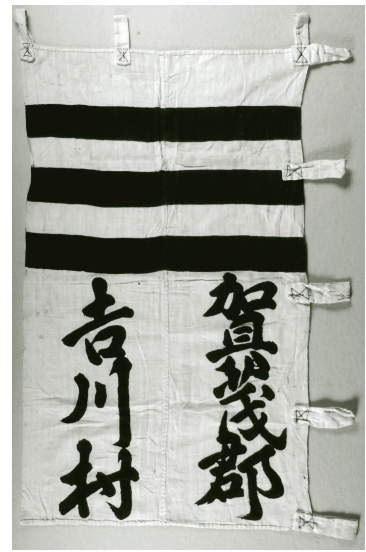
**軍用夫勤め候人別へ跡示談約め帳** (竹内家文書 419)  
第二次征長でも賀茂郡から軍用夫が徴用され、くじ引きで順番が決められた。この文書は、吉川村軍用夫の家族に対する援護内容について記す。左端、一番手の毛平は家計が苦しく、母親は病気で立ち行かないので、村から飯用米5升を支給し、農業は隣家と講中が手伝うことになっている。



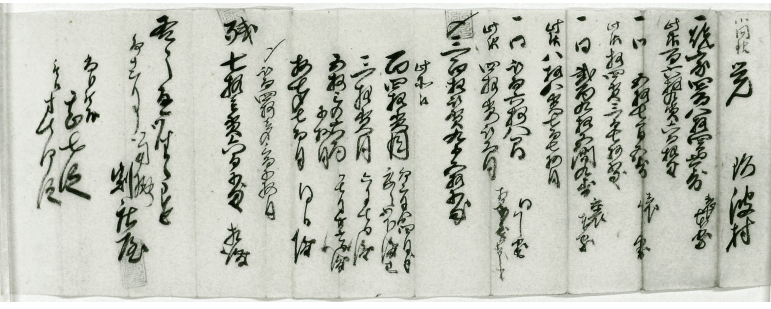
**第二次征長風刺の狂歌**  
(平賀家文書 1607「異聞慢録」)  
2首目に「征伐は去年尾張てよいものを またもふれ出す紀州ばか山」とある。慶応元年10月ごろ、領民が第二次征長を始めた幕府をどのように見ていたか窺える。



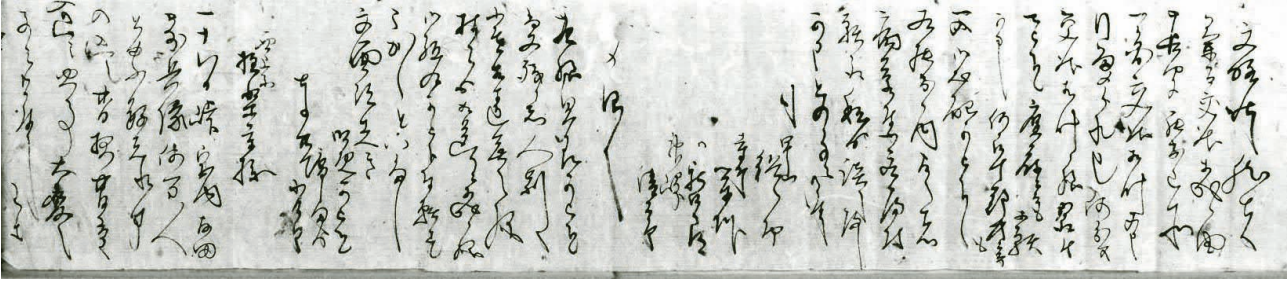
**幕臣・小野友五郎の日記** (小野家文書 412)  
友五郎は慶応2年6月18日の日記に大野の戦況を「勝負七分三」と記す。咸臨丸の航海長であった友五郎は第二次征長で幕府軍の広島進攻を準備し、自身も軍艦に乗り込んで大島砲撃に参加した。



**賀茂郡吉川村軍用夫の幟**  
(竹内家文書)  
軍用夫は、広島藩の白地に三つ引きの旗印に、村名を加えた幟を持って広島へ出張した。



**第二次征長で被災した佐伯郡玖波村へ小間銀渡し書付** (大知家文書 11)  
第二次征長で玖波村は全家屋の約9割、367軒が焼失した。広島藩はその再建費用を小間銀(間口の間数を基準に、等級ごとの税率を賦課する)を用いて算出した。玖波村の小間銀額は312貫955匁で、慶応3年7月までの241貫350匁の残り71貫605匁が12月に渡されている。



**戦地出張農兵の交代を願う書状** (極楽寺文書 21)  
世羅郡から広島へ出張した農兵小太郎が、一向に交代がないので取り計らってほしいと同郡極楽寺住職に宛てた書状。第二次征長で広島藩は出兵を拒否したが、開戦後、問道警備のため各郡の農兵を招集して配置することにした。7月18日、広島藩との約束を破って長州藩兵が進攻して来たため、広島藩も交戦を決定した。召集された農兵も前線で戦いに加わるようになった。小太郎は書状で「十八日時・宮内・友田寄兵隊何万人とゆふ数しれす入込ミ」と恐怖におののく。

#### 四 廃藩置県と武一騒動

明治四年（一八七二）七月、廃藩置県の詔勅が出て広島藩は広島県となり、旧藩主は東京への移住を命じられます。

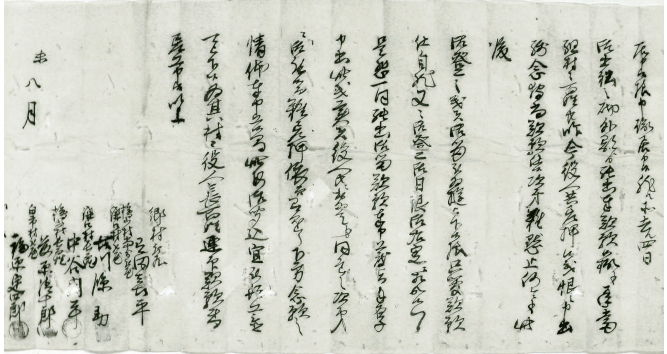
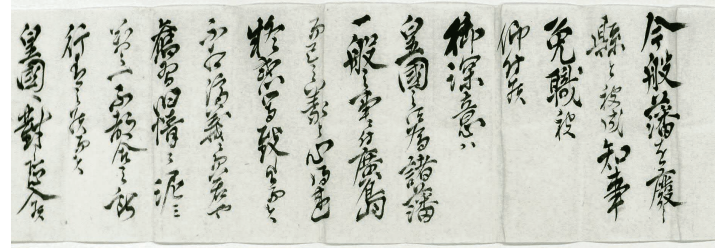
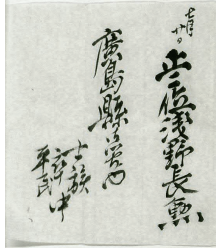
上京中の藩知事浅野長勲は動揺しないよう旧領内へ通達しますが、八月四日、旧藩主浅野長訓一行が上京のため広島城を出たところ、別れを惜しむ多数の民衆に押しとどめられ、上京は延引されます。その後も各地から続々と民衆が押しかけ、九日に山県郡壬生村で、説得に赴いた官員が襲われた事件を契機に、山県郡内の割庄屋宅が打ちこわされ、城下でも豪商や官員宅が襲われる事態となりました。長訓や県庁の説得にもかかわらず騒動は全県下へと拡大する様相を見せたため、県は兵力で城下の騒動を鎮圧します。その後も各地で割庄屋や庄屋宅が攻撃を受けますが、県は武力でこれを抑え込みました。この事件が「武一騒動」です。

武一騒動は、旧領主との離別を惜しむという民衆の心情から発しました。しかし、これは裏返せば、幕末を通じて課された多くの負担が、新政府になると帳消しになり、いつそう困窮するという不安を民衆が抱いたからにほかなりません。当時の浮説流言には、藩知事から下された三〇〇〇両の「涙金」を割庄屋が取り込んだとか、新政府のもとでは年貢取立て枵が大きくなり、増徴になるといふものがあります。割庄屋や庄屋に対する疑惑や、今後の諸負担の増加への反対が、武一騒動の原因の一つであったことがうかがえます。

#### 廃藩置県につき心得違いを戒める浅野長勲教諭書

（八田家文書 5999）

廃藩置県で藩知事を免職となり、東京移住を命じられた浅野長勲は、当時上京中であったが、廃藩置県は他藩も同様なので、動揺しないようにと領内へ伝えた。

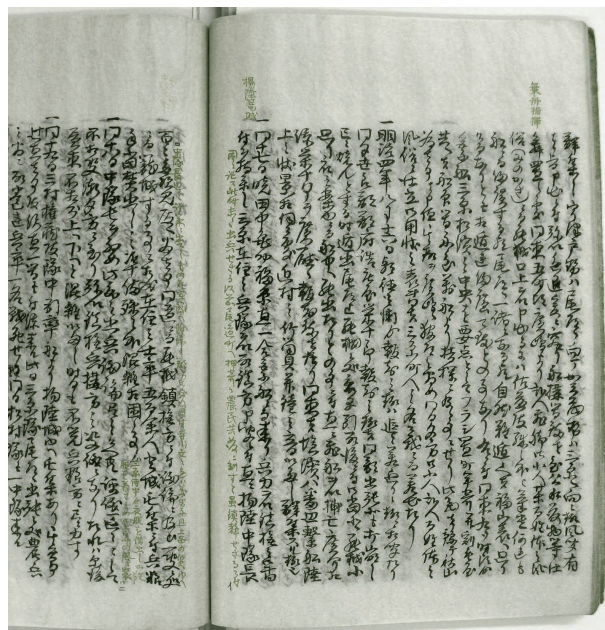
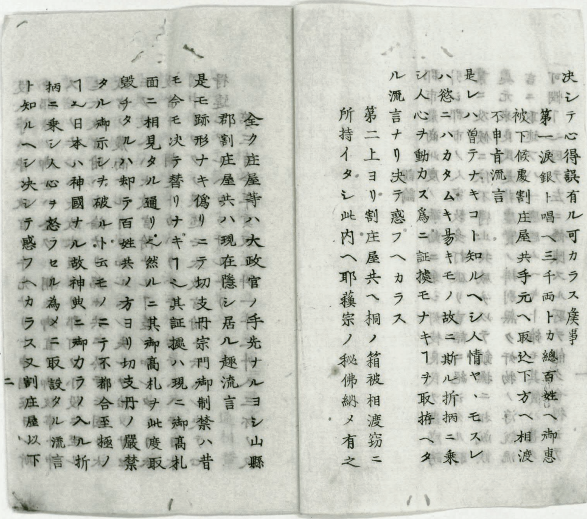


#### 竹之丸様東京移住につき賀茂郡高屋組歎願書（有田家文書）

浅野長訓の上京を止めたい村民の感情を、賀茂郡高屋組の村役人が代弁して提出した歎願書。4日の出広を止められた村民の不满を抑えきれなくなった村役人は、打ちこわされる恐怖からやむなく提出に至ったものと思われる。

#### 広島騒動聞書（海宝寺文書）

暴動が起きた8月12日の広島の様子を記す。打ちこわしを受けた金屋では商品の綿が道に撒かれ、大雪のように真白になった。



#### 広島県庁説諭書（重清家文書 750 - 1）

広島県庁は、当時の7つの流言の一つずつ否定して領民を説諭した。第一の流言は、総百姓に下された3,000両の涙銀を割庄屋が取り込み、下へ渡さなかったというものである。領民の村役人に対する不信感と、当時の困窮ぶりが窺える。

#### 宮本愚翁日記抜粋（宮本家文書 412）

宮本亥三二（愚翁）が広島藩の下級官吏として勤務していた三原へも、世羅郡方面から一揆勢が押し寄せて来た。亥三二は職員の混乱ぶりを日記に記している。

幕末維新関係年表

年	西暦	月	事項
嘉永6年	1853	6月	アメリカの提督ペリー、浦賀に来航して国書提出
		12月	広島藩、大砲製造のため不要の銅類の献上を命令
安政元年	1854	1月	ペリー再渡航（3月に日米和親条約調印）
		4月	広島藩、異国船防禦のため寸志御用銀提出を命令
		11月	安政大地震
安政2年	1855	4月	広島藩、寺院の梵鐘を大砲・小銃に改鑄することを藩内に布告
安政5年	1858	4月	広島藩主浅野斉肃隠居、新藩主浅野慶熾 彦根藩主井伊直弼、大老に就任
		6月	日米修好通商条約調印（同年中に蘭・露・英・仏とも調印）
		9月	安政の大獄（～1859）で尊攘派公卿・大名・志士の弾圧 広島藩主浅野慶熾死去
		11月	広島藩青山分家の浅野長訓が広島藩主となり、茂長と改名
安政6年	1859	6月	神奈川・長崎・箱館の開港
万延元年	1860	1月	遣米使節随行の咸臨丸出航（航海士は小野友五郎）
		3月	桜田門外の変で井伊直弼暗殺
文久元年	1861	6月	浅野茂長、船で領内沿岸を廻在（～7月）
		7月	浅野茂長、領内西・北部を廻在（～8月）
		9月	浅野茂長、領内中・東部を廻在（～10月）
文久2年	1862	2月	皇女和宮、14代将軍家茂に降嫁
		10月	浅野茂長、藩政改革を訓令
文久3年	1863	3月	広島藩、攘夷決行を領内へ布達（4月に5月10日期限を布達） 広島藩、沿海各郡に海防掛り（海防夫）を設置
		4月	広島藩、沿海各郡で農兵を設置
		5月	長州藩、下関で外国船を砲撃
		6月	倉橋・鹿老渡・大崎上島・御手洗・生口島・因島・向島に砲台建築 広島で日田邦太の天誅事件
		7月	広島藩、大規模な郡制機構改革に着手（8月に郡役所内に勸農方を設置）

年	西暦	月	事項
文久3年	1863	8月	京都で八・一八政変（尊攘派の京都追放）
元治元年	1864	1月	広島藩、勘定所に生産掛を置き、殖産興業を図る
		2月	広島藩、農兵を領内全般に拡大
		7月	京都で禁門の変（長州藩出兵上京で敗北） 幕府、長州藩追討の勅命を広島藩等へ通達（第一次長州征伐）
		8月	四国連合艦隊、下関を砲撃 幕府、広島藩を芸州口先鋒に命じ、広島を本営に決定
		9月	広島藩、軍用夫徴集のため、藩内の15～50歳の人員を調査
		10月	福山藩兵が領内を通行。以降幕府・諸藩兵が広島へ集結
		11月	長州藩謝罪し、広島国泰寺で三家老の首実検
		12月	第1次征長の解陣を布達
慶応元年	1865	4月	幕府、将軍の進発を決定（第二次長州征伐）
		11月	幕府、広島藩に芸州口先鋒を命令
慶応2年	1866	1月	薩長同盟成立
		6月	幕府軍艦が周防大島を砲撃して開戦。芸州口でも開戦（広島藩は出兵を拒否）。広島藩、間道警備のため農兵等を召集
		7月	将軍徳川家茂死去 長州藩が広島藩との約束を破り進軍し、一時交戦の危機
		9月	勝海舟が厳島で休戦交渉。幕府から征長中止を発令
慶応3年	1867	9月	神機隊結成
		10月	大政奉還
		12月	王政復古の大号令
明治元年	1868	1月	鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争開始、翌年5月に終結） 豊田・御調郡に倣い、賀茂郡で義民を募り練兵を開始
明治2年	1869	1月	広島藩主浅野長訓隠居、新藩主浅野長勲
		6月	版籍奉還
明治4年	1871	7月	廃藩置県
		8月	武一騒動

平成22年度収蔵文書展

激動の時代 幕末維新の広島と古文書

発行 平成23年(2011)3月28日  
 編集・発行 広島県立文書館(担当 西村 晃)  
 〒730-0052 広島市中区千田町三丁目7-47  
 TEL (082) 245-8444 FAX (082) 245-4541  
 E-mail: monjokan@pref.hiroshima.lg.jp  
 印刷 アロー印刷株式会社

表紙:「米艦図並に江戸湾図付御固大名附」(安政元年、松尾家文書1)より

参考文献:『広島県史』近世2、『廿日市町史』資料編Ⅳ・通史編(上)など

協力:広島県立歴史博物館